

〔研究ノート〕

鎌倉時代の人物表現をめぐって—天皇・貴族と僧侶の肖像—

高位の貴族の顔貌表現法として「引目鉤鼻」はよく知られています。文字通り目を細い線で、鼻を「く」字形に表し、表情が読み取りにくい、抽象的な描写といえます。「源氏物語絵巻」(徳川美術館・五島美術館)や「寝覚物語絵巻」(大和文華館)といった、平安時代の物語絵巻に典型的な表現方法です。続く鎌倉時代に制作された『源氏物語』の写本である「源氏物語浮舟帖」(大和文華館、図1)や、平安時代末から鎌倉時代の公卿である藤原隆房の悲恋を描いた「隆房卿艶詞絵巻」(国立歴史民俗博物館)にも認められます。ともに白描の手法で描かれ、描線は謹直で、打ち込みや払いといった筆運びの痕跡を極力残さない、没個性的なものです。この描線の特色は、平安時代の物語絵巻に引かれた描き起こし線と共通しています。すなわち、彩色の有無を問わず、王朝物語絵巻に登場する高位の貴族の描き方には一定の規範があったことが窺えます。白描の手法による王朝物語絵巻の制作は、『紫式部日記』や『栄花物語』の記述から、11世紀前半には既に存在していたことが知られ、濃彩作り絵の手法と併存していたことが明らかにされています。「源氏物語浮舟帖」や「隆房卿艶詞絵巻」の存在はまさに、平安貴族の美意識によって生み出された高位の貴

族を描く際に用いる描線が、鎌倉時代まで継承されていたことを示します。

一方、僧侶の姿に注目しますと、白描画では、平安時代後半に制作された高僧図像が挙げられます。例えば、「先徳図像」(東京国立博物館)は、高野山で活躍した図像家・玄証によって描かれました。描線は伸びやかで美しく、整えられたものですが、先に見た貴族を描いたものとは異なり、筆の打ち込みや払い、筆運びの痕跡は明瞭です(図2)。描線の太さも一定ではありません。ただ、このような描線は密教図像全般に共通する特色であり、描き手の技量に左右されるものです。本格的な最初の仏教図像集である『図像抄』が、1139年に鳥羽上皇の命によって編纂されたことから理解されるように、院政期には天皇や貴族が密教図像へ高い関心を示しました。従って、観賞性の高い図像が求められるようになりますが、描線の規範性までは要求されなかったでしょう。

鎌倉時代は「肖像画の時代」と呼ばれるように、人物表現にとって重要な時期です。「似絵」という、像主の特徴を捉えることを重視した画期的な肖像画が流行します。陰影を付けず、細かい描線を駆使して描くもので、藤原隆信から、信実、為信、専阿弥陀仏、豪信へと代々

技術が伝承されました。僧侶の肖像の代表作としては、「親鸞聖人像(鏡御影)」(西本願寺)が挙げられます。親鸞の曾孫である覚如が記した裏書によって、専阿弥陀仏が描いたことが分かります。本図の特色は、頭部と体部の著しい表現の違いです(図3)。細い描線で丁寧に描かれる顔貌に対し、体部は荒々しい筆致で筆の運びも明瞭です。また、淡い墨線に濃墨線が重なり、淡墨線が単なる下書きに止まらない、表現の一つとして活かされている点も重要です。こうした描線の差異については、描いた人物が異なり、頭部の輪郭や、目・鼻・口といった部分が、親鸞在世中の1255年に描かれた「安城御影」(東本願寺)と一致することから、肖像画制作に用いる紙形として描かれたと理解されています。本紙には折りたたまれた痕跡があり、本画ではない可能性があるにしても、頭部と体部の表現の特色は、現存する白描画の中でも異例です。

ただ、人物像として他の作例と比較すると、「面貌細筆」かつ「衣紋粗筆」と見せる表現方法は、中国・南宋時代の伝梁楷筆、石橋可宣賛「豊干図」(図4)のような、五代・北宋期に展開するという逸品画風に淵源を持つ粗筆人物画を想起させます。筆致や濃淡の極端な差異を併存させた人物表現は、南宋時代の作例と共通すると思われる。また近年、似絵の源流を中国の「尚齒会図」という文人肖像画に求める説が提唱されました。

現存作例はありませんが、推測する手がかりとして挙げられる「楊竹西小像図巻」(元時代・14世紀、北京・故宫博物院、図5)との親近性もあるように思われます。

天皇の姿を描いた「似絵」は、伝信実筆「後鳥羽天皇像」(図6・水無瀬神宮)や豪信筆「花園上皇像」(長福寺)が知られます。顔貌は引目鉤鼻ではありませんが、用いられる描線は、没個性的なもので、先に述べた規範が守られていることが分かります。平安時代以来の伝統的な美意識の延長上に位置づけられます。一方、水墨の技法を主とした新たな人物表現は、天皇や公家の描写ではなく、僧侶という「描線の規範」対象外の人物表現との間に親近性が認められます。対象となる人物の身分や立場に留意しつつ、用いられた描線の種類に着目すると、「似絵」の起源や展開を知るヒントになる可能性があります。「鏡御影」に見られる特異な表現は、当時の日本における文人肖像画理解、ひいては水墨技法の理解や受容の実態を知る手がかりとなるかもしれません。(古川攝一)

※図2は『白描の美』図録、大和文華館、2017年、図3・6は『中世絵巻と肖像画<日本美術全集8>』小学館、2015年、図4は『南宋絵画』図録、根津美術館、2004年、図5は『国華』1255、2000年より複製致しました。



図1



図2



図3

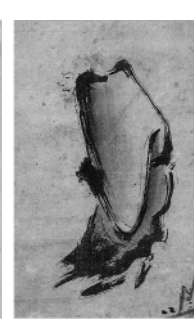


図4



図5



図6